

<別紙1>

平成18年度 全国水生生物調査の結果概要について（環境省同時発表）

1. 主 旨

河川に生息するサワガニ、カワゲラ等の水生生物の生息状況は、水質汚濁の影響を反映することから、それらの水生生物を指標として水質を判定することができます。このような調査は、一般の人にも分かりやすく、高価な機材等を要しないことから誰でも簡単に参加できるという利点があります。また、調査を通じて身近な自然に接することにより、環境問題への関心を高めるよい機会となるため、国土交通省と環境省では、昭和59年度から全国水生生物調査を実施しています。

2. 平成18年度調査結果の概要

(1) 調査方法

本調査では、河川に生息する水生生物のうち、①全国各地に広く分布し、②分類が容易で、③水質に係る指標性が高い、30種を指標生物としています。

河川で水生生物を採集し指標生物の同定・分類を行い、地点毎に、Ⅰ（きれいな水）、Ⅱ（少しきたない水）、Ⅲ（きたない水）、Ⅳ（大変きたない水）の4階級で水質の状況を判定しています。

(2) 調査結果

○参加者数

平成18年度の参加者は74,968人（前年度85,910人）となりました。

	参加者数	参加団体数	調査地点数
合計	74,968人	2,013団体	3,489地点
一級河川 ※1	16,195人	524団体	642地点
その他の河川 ※2	58,773人	1,489団体	2,847地点

※1 一級河川大臣管理区間のこと（以下「一級河川」という）

※2 一級河川都道府県知事管理区間及び二級河川等（※1以外の河川）のこと
（以下「その他の河川」という）

○水質判定結果

平成18年度は60%の地点が「きれいな水」と判定されました。前年度（59%）から1%増加しています。

	合計	一級河川	その他の河川
Ⅰ きれいな水	60%	59%	61%
Ⅱ 少しきたない水	25%	35%	23%
Ⅲ きたない水	11%	5%	13%
Ⅳ 大変きたない水	2%	0%	3%
判定不能	1%	1%	2%

※ 四捨五入による端数処理のため、内数の合計が100%にならないことがある。

平成18年度全国水生生物調査結果（詳細）

1. 参加人数及び参加団体数

平成18年度の参加人数は74,968人となった。

うち、一級河川^{※1}は16,195人であり、その他の河川^{※2}は58,773人であった。また、参加団体数は2,013団体で、うち一級河川は524団体であった。

参加団体別の参加人数は小学校での参加が最も多く、次いで中学校、各種団体となっている。

都道府県別の参加者数では福島県が最も多く、次いで岐阜県、岩手県となっている。なお、一級河川では北海道が最も多く、2,586人であった。

※1 一級河川大臣管理区間（以下「一級河川」と言う）

※2 一級河川都道府県管理区間及び二級河川等※1以外の河川（以下「その他の河川」と言う）

参加者数の多い都道府県

順位	都道府県名	参加人数	うち一級河川
1	福島県	8,898	1,096
2	岐阜県	6,532	310
3	岩手県	6,214	298
4	愛知県	5,281	714
5	山形県	2,935	244

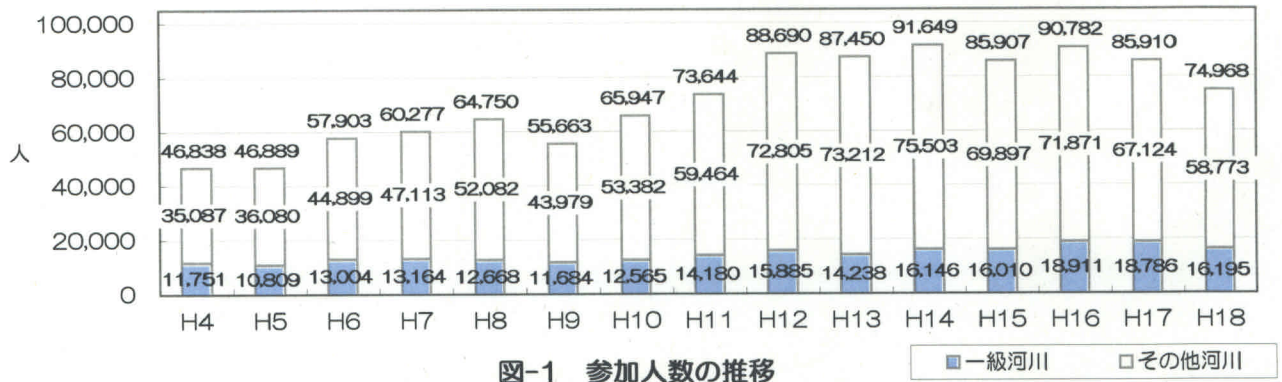


図-1 参加人数の推移

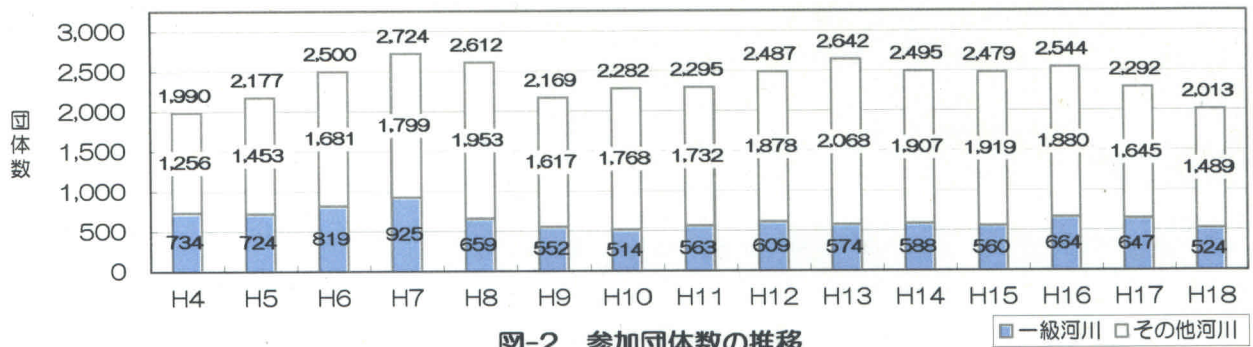
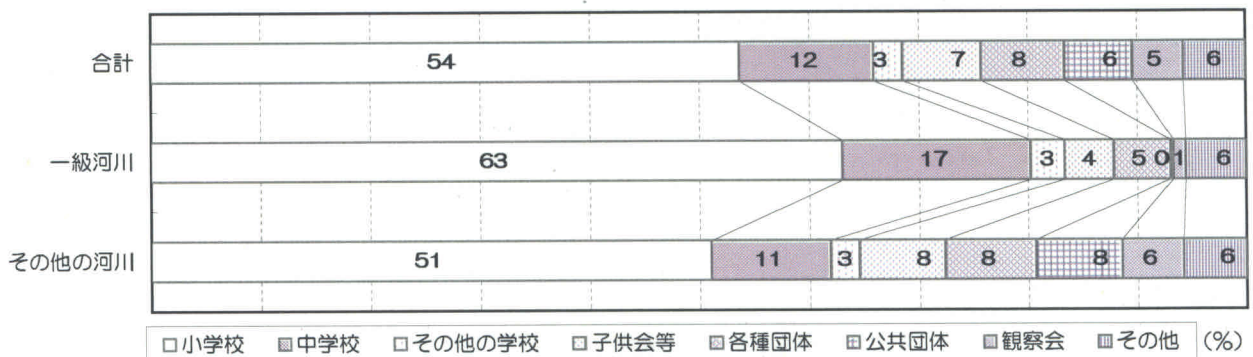


図-2 参加団体数の推移



※四捨五入による端数処理のため内数の合計が100%にならないことがある。

図-3 参加人数の団体種類構成比

2. 調査地点数

調査地点数は3,489地点であった。

内訳は、一級河川は642地点、その他の河川は2847地点となっている。

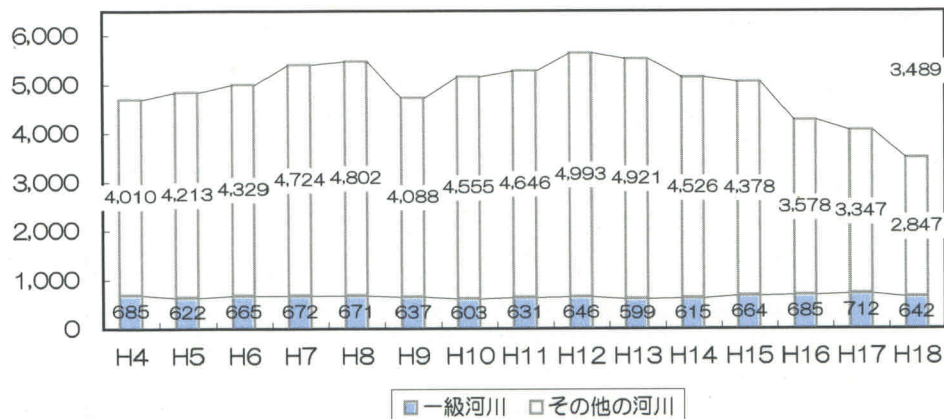


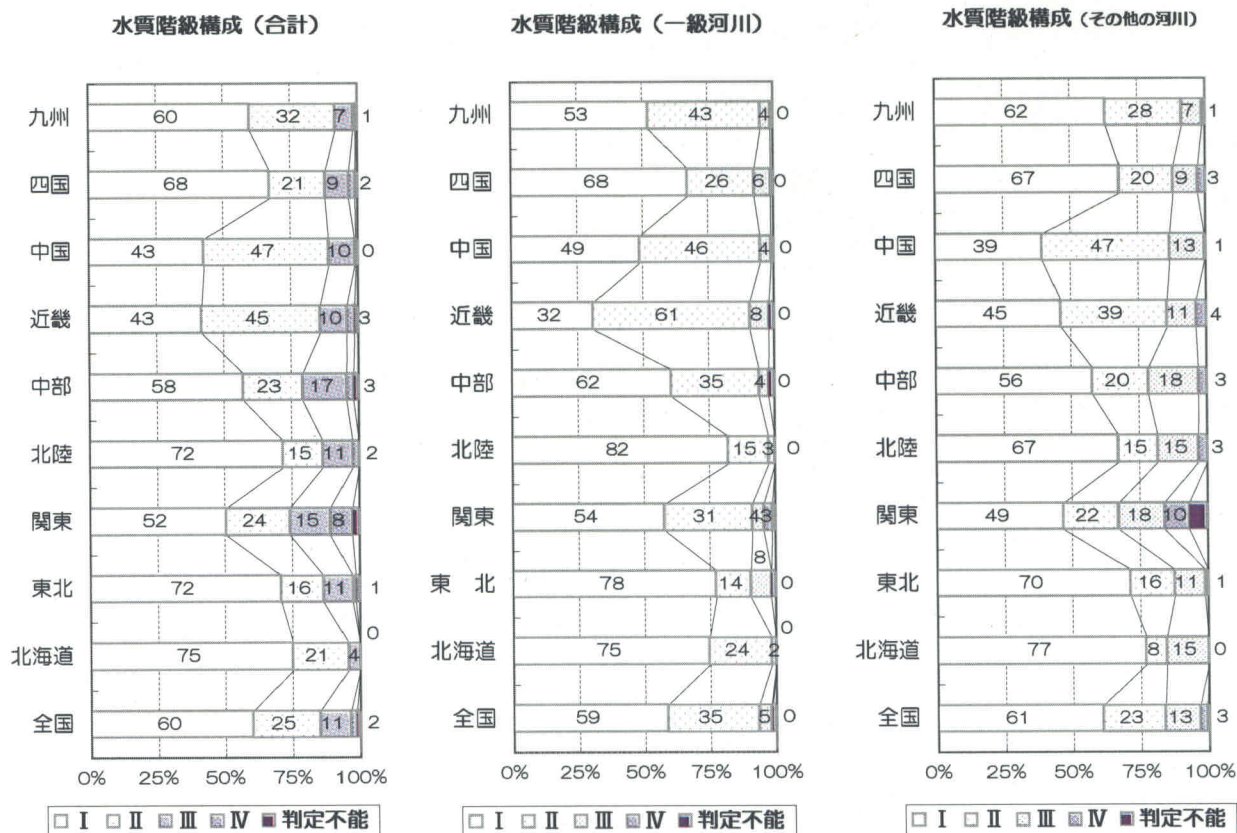
図-4 調査地点数の推移

3. 地域別水質階級構成（地域別の水質の状況）

本調査は、調査地点を参加者が任意に選定するため、我が国の河川の状況を正確に代表したものではない。しかし、多数の地点で調査されているため、全国の水質の状況を概括的に知ることができると思われる。

平成18年度は、全国で水質階級Ⅰ（きれいな水）と判定された地点が60%、Ⅱ（少しきたない水）が25%、Ⅲ（きたない水）が11%、Ⅳ（大変きたない水）が2%であった。

Ⅰ（きれいな水）の割合でみると近畿、中国地方は50%以下であったが、北海道、東北、北陸地方は70%以上の高い値であった。各地方の一級河川とその他の河川のⅠ（きれいな水）の構成比は全般に似通った値となっているが、近畿地方はその他の河川の方がⅠ（きれいな水）の構成比が高く、東北、北陸地方では逆に一級河川の方が高いなど地域による差も生じている。



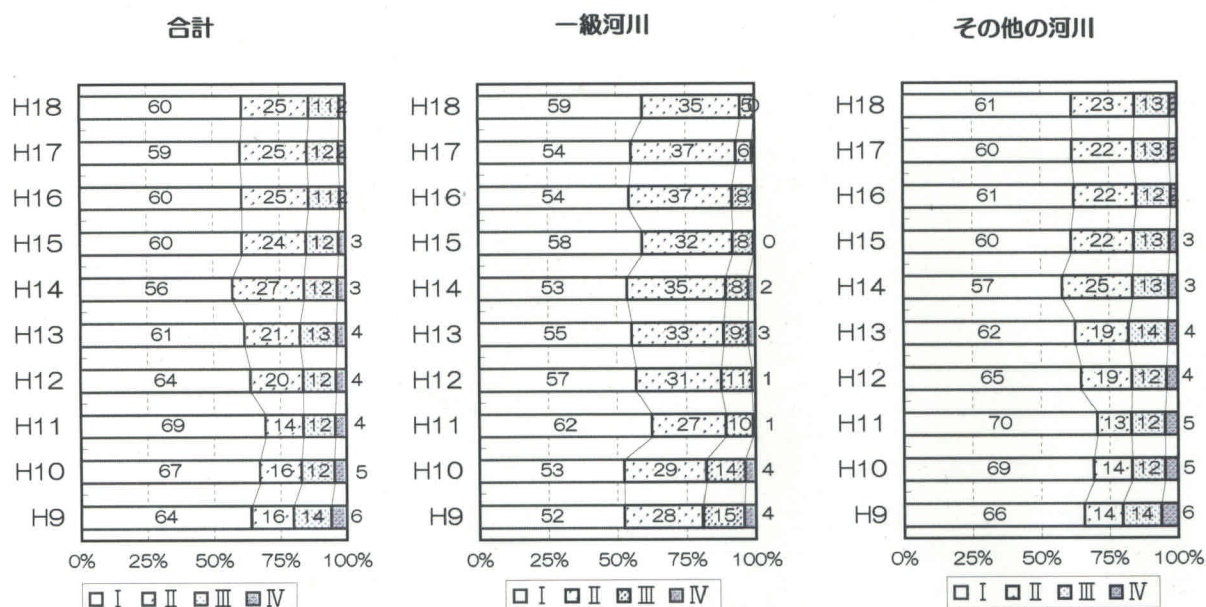
※四捨五入による端数処理のため内数の合計が100%にならないことがある。

図-5 地域別水質階級構成比

4. 水質階級構成比の年次推移

全国の全調査地点の水質階級構成比を図6に示した。

平成11年度をピークとして、Ⅰ（きれいな水）と判定された地点の割合は減少傾向にあったが、平成15年度にⅠ（きれいな水）と判定された地点の割合が4%増加した。本年度は昨年度から1%増加して60%となり、Ⅲ（きたない水）と判定された地点は1%減少している。

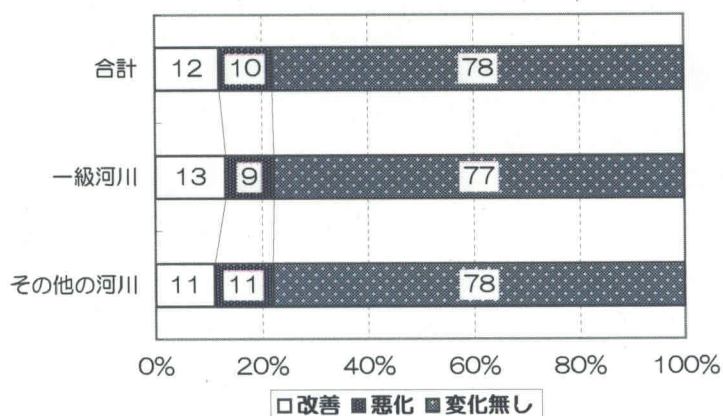


※1 判定不能地点の扱い及び四捨五入による端数処理のため内数の合計が100%にならないことがある。
 ※2 平成12年度から調査手法を変更しているため、平成12年度と平成11年度以前の厳密な比較はできない。

図-6 水質階級構成比の年次推移

5. 前年度（H17）との比較

前年度と同じ地点で調査された1,482地点について比較すると、12%の地点が改善、10%の地点が悪化、78%の地点が同じ水質階級であった。



※四捨五入による端数処理のため内数の合計が100%にならないことがある。

図-7 同一調査地点での昨年度との比較